

近衛信尹・前久詠「法楽一夜百首」攷

大 谷 俊 太

—

三藐院近衛信尹さんみやくいんのぶただ（永祿八年（一五六五）〜慶長十九年（一六一四）、五〇歳）は、慶長五年（一六〇〇）五月七日から八日にかけて「住吉法楽一夜百首和歌」【A1】拙稿「三藐院近衛信尹詠「住吉法楽一夜百首」のこと」、『歌神と古今伝受』（和泉書院、二〇一八・一〇刊予定）所収）を詠じたほかに、知る限りもう一度、同じく「法楽一夜百首」を詠じている。その百首については、百首揃った詠草が二点【B1】【B3】と冒頭部分の詠草断簡一紙【B4】ならびに短冊状の紙に記された草稿一綴【B5】が陽明文庫に伝わるが、推敲を経た後の本文を示している（後述）『信尹公御詠草』（59242）に拠って先ずは翻字を掲げる【B1】。『信尹公御詠草』（59242）の書誌事項は以下の通り。

写本。大本。縦二九・一糎、横二四・八糎。一冊。楮紙。袋綴。仮綴。表紙、本文共紙。外題「信尹公御百首」（左肩・

打付書。内題「百首」。墨付十丁。遊紙なし。信尹周辺人物の筆か。81番歌に朱の書き入れあり。

【B1】

百首

早春霞

信尹

1 久方の空かきくらし降雪の雲路たどらで春は来にけり

孤島霞

2 春風に行ゑははるゝ跡よりも嶋めぐりする朝がすみ哉

霞隔村

3 山本の里も水無瀬とわかぬまで立そふ春の夕がすみかな

霞春衣

4 今日ことにあさき山べもふかみどりそふやかすみの衣ほすらん

沢若菜

5 あさはの水のよどみと見えつるはかつもえわたる若菜なりけり

山家鶯

6 わきて誰友となるらし山かげの庵りあまたのうぐひすの声

池余寒

7 朝こほり春もしばしは池水にみがくれつゝやさえ残るらん

故郷梅

8 梅がゝはやどかる袖にこもり江のはつせのさとの春のゆふ暮

澗落梅

9 谷水のながれに落る梅がゝをたゝへて花の淵となさばや

春暁月

10 よこ雲を跡の山路のわかれにて行急はかすむ在明の空

去鴈遙

11 名残いましのぶるつまやへだて行いもせの山のみねのかり金

柳似煙

12 風をいたみなびく煙のいとすぢもおなじ柳の枝にみだるゝ

春草短

13 道芝の枯生にしばし風の音こもるや野べの荻の下もえ

嶺間蕨

14 谷の戸にかへるさとをく暮にけり嶺の早蕨おるとせしまに

花初開

15 こたへせばかつさきそむる花にまづ待し日数をつけまし物を

花満山

16 朝なくきえ問ふりつぐ心ちして山はなべての花のしら雪

花半落

17 また来てをそき梢と見しは今おちくる花の滝の水上

杜歎冬

18 いはぬ色もそれとはしるし山ぶきのさく神なびの森の木がくれ

古寺藤

19 古寺の廊をはるかにめぐる日もながきしなひにさける藤なみ

残暑少

20 入あひのかねより後のかねのこゑきかぬまのみの春をしぞ思ふ

首夏風

21 花ちりし跡のわか葉の梢さへあかずとや猶風のとふらん

朝更衣

22 見し夢と春は残らぬあさぼらけまだき立きる夏衣かな

岡新樹

23 あさもよひきくの若葉のもみちばゝかくともえやは水茎の岡

谷郭公

24 時鳥なきてしばしは久かたの雲ゐに溪の声をそへけり

時鳥頻

25 待ほどの山路いでよとすゝめてや鳴ほとゝぎす声しきるらん

橘薰枕

26 手枕の夢路よりしもかよひ来てうつゝにかほる軒の橘

簷菖蒲

27 朝露のつたふあやめにかぜふれて簾にかゝる軒の玉水

採早苗

28 いつしかに五月きぬとや門の前の田子のおりはへ早苗とるらん

泊水鶏

29 あまのすむ戸ざしをたゞく水鶏にややどりまかせてよる泊舟

野夏草

30 夏草をわくるはてしや秋風のふくらんほどのむさし野の原

雨中螢

31 むば玉のくらき雨夜もたどらでやをのがひかりに螢とぶらん

垣夕顔

32 山がつのかきほあるとも見えぬまで咲とちけりな夕がほの花

麓納涼

33 夏は世の外とやおもふみねおろしのかぜをふもとの里の住みは

湊夕立

34 湊河汀まさると見るばかり波よりきほふ夕だちの空

杜夏祓

35 諸人のたちよりつゝもみそぎするかげみたらしの杜の下道

新秋露

36 立すゞむ袂にわきてをく露や秋くるよひのしるべ成らん

待七夕

37 百草の花の手向をこゝろにて七夕つめのあふ夜まつかな

幽居萩

38 とまぶきのひまもる露をたよりにて床にも萩の風ぞみだるゝ

萩映水

39 風ふけば汀にしづく秋はぎの花の波よる野路の玉河

古砌薄

40 わたつうみとあれし砌を来て見ればしげき尾花の波のみぞたつ

原刈萱

41 みだれをく露やかるかやその原のそれとは草の色にわかねば

寝覚虫

42 夢の後は秋といひてもみじか夜にあかず誰まつ虫の鳴らん

海辺鹿

43 月の色もあかしのせとの追風に鹿の音のせて出る舟人

秋夕風

44 身にしめる秋のゆふべのあはれさは葛のうら風萩のうは風

関駒迎

45 望月のかげふむばかりあふ坂の関路はれ行きりはらの駒

山月明

46 雲霧をはらふ嵐に嶺晴て月のかけたる鏡山かな

江月冷

47 水底に入江のかげもふけゆけばこほりてうかぶ秋の夜の月

松月幽

48 月は猶西の海辺にすみ吉の松をへだつる影ぞすくなき

擣寒衣

49 明がたは夜さむそへばやきくまゝにあさの衣のいとせめてうつ

雲端鷹

50 誰かまづきゝそめにけん白雲のはつかにもらす天津かり金

堤上霧

51 あさ風のさそふと見えて行かたの堤をわたる遠の河霧

野径鶉

52 露さむき野辺の浅ちの夕ぐれや鶉の床とつげてなくらん

里黄葉

53 露時雨音羽のさとにをとづれしほど見えそむるうす紅葉哉

滝紅葉

54 もみち葉のかげ行ほどはくれなゐもすゑ染のこす滝のしら糸

暮秋菊

55 しら菊のさかりのほども長月にならへ後見ん秋のかたみに

初冬嵐

56 草も木もしほれもて行足曳の嵐や冬をさそひきぬらん

渡時雨

57 いかにせん時雨の雨にかりよらん家路なにおふ佐野のわたりは

橋落葉

58 ちりしける木の葉の色につきはしやたゞ一すぢの山あひの道

寒草短

59 霜をへし小野のさゝ原それさへも草根に残るうす緑哉

江寒蘆

60 折かゝる蘆のほなみも江の水の氷りの上にとぢかさねけり

河千鳥

61 さよ風に瀬のこゑも猶たてそへて明がたさむき川千鳥哉

淵水鳥

62 そこひなき淵やはさはぐととばかりにをのがさまくねぶるをし鴨

井辺氷

63 おちつたひこほる雫やをのづから石を井げたのくさびなるらん

寒夜月

64 庭の面の苔に真砂をしくばかり月より見つる霜の色かな

篠上霰

65 さゝのはのさらに音して音絶るほどやあられの降たまるらん

狩場雹

66 のがれめや犬やる草の玉あらればはしるかりばの鳥の行ゑは

庭初雪

67 跡つけて人のとふやと待ほどにむらぎえになる庭の初雪

駅路雪

68 むちうちてのるもすゝまぬ駅ちの鈴鹿の関や雪もとぎせる

遠炭竈

69 すみがまのけぶりなるらし山里のあさけゆふけの外にたつるは

歳暮念

70 誰うへもさずが心のいとまなみくれねといそぐ年ならねども

寄鐘恋

71 いつかさてともにきかまし暁のわかれもよほすかねといとひて

寄燈恋

72 とひくやと下待ふかす手すさびにねやのともしびかゝげつくしつ

寄枕恋

73 夜なく／＼に我ひとりしく枕とはつれなき人やさだめ置けん

寄筵恋

74 おもひあまりうちぬるほどにかた敷もわがためひろき夜はのさ筵

寄床恋

75 涙のみ床の海とは成ながらあはれ見るめはよそのうらなみ

寄匣恋

76 なげきてもあはんふたなき玉匣みをばあだなる物になせとや

寄櫛恋

77 おもかげはあかぬ心のみだれがみつげのをぐしもさゝぬばかりに

寄琴恋

78 玉だれのへだてにもるゝ琴の音にかよふ心よしるべともなれ

寄笛恋

79 笛竹のわれて妻こふさをしかの声も心のほかにやは聞

寄絵恋

80 とりかはしならすあふぎのうつし絵もまよひにけりな花の面影

寄車恋

81 見ずもあらぬ行多をしたふ小車の我からまよふ恋の道かな

寄舟恋

82 あらき波へだつる磯のよるべなき身はうき舟のうらみてぞふる

寄筏恋

83 こえがたき恋の山路や世をうみにいかだうかぶるためし成らん

寄篷恋

84 舟とめてはれぬながめにふく篷の雫そへけり袖のうら波

寄棹恋

85 見せばやなあふ瀬をたどるたかせ舟さほのいとなくぬるゝ袂を

隣里鶏

86 とりがねもちかき隣の里人のね覚の友とね覚するかな

草庵雨

87 人こじとおもひたえぬるひとりゐは草の庵の雨ぞ友なる

山館竹

88 くれ竹のはやしもふかくつゞく也軒のうしろの山をめぐりに

橋上苔

89 山人のふむ跡見えて岩はしにわたしもはてぬ苔の色かな

田家水

90 もりすつる田中の庵の垣ねをもとめ来てたえぬ水の音信

塩屋煙

91 すみぞめのゆふべさそふや芦のやのなだの塩やのけぶりなるらん

行路市

92 市にたつ袖はしかまのかぢ人のゆきよくまに時もうつりぬ

鞆中衣

93 露霜にしほれし袖をほす程はかせや衣の関のせき守

旅泊夢

94 都思ふ夢をばみつのとまり舟うきねのほどのすさびとぞなる

望遠帆

95 松浦がたひれふる山のかひなしやさほひく船の跡の名残は

老述懐

96 ながらへば老の後さぞ心ともなき世中をおもひ出まし

思往事

97 くり返し忍ぶるはたゞむらさきのはつもとゆひの身の昔かな

上陽人

98 十年あまり六も六十の春秋をむなしき床に送るひとりね

陵園妾

99 燕いに蝉の声きく松の戸のつらさおもふもうらめしきかな

寄国祝

100 まもれ猶おさまる国は久かたの天みつ神と世にあふぐなり

前掲拙稿所収の【A1】住吉法楽百首の場合と同じく、本資料には法楽和歌であることが明記されていない。だが、陽明文庫所蔵の関連資料の三点のうち、同じく百首が揃った詠草の『信尹公御詠草』(59240)【Bc】の信尹自身の筆による外題には「北野法楽 慶長七年二月廿五日 從廿四日始之」とあり、本百首が、慶長七年(一六〇二)七月二十四日から二十五日にかけて詠まれた北野法楽一夜百首であることが確定する。二月二十五日は菅原道真の祥月命日で、通常、聖廟法楽歌会の日であるが、慶長七年は道真の七百回忌に当たる。

七百年紀也。百首成就。〔三藐院記〕慶長七年二月二五日条)

この時、北野では万句興行がなされている。

一、北野法楽短冊清書シテ竹門へ進上。又、松梅院へ万句発句遣、銀子五匁相添候。(中略)一、百首詠吟。〔時慶卿記〕
慶長七年二月二十四日条)

一、北野七百年ニ及ト。万句在之。兼テ予モ松梅院会ニ雖約束、不私義ニ相遅無念ニ候。(同二十五日条)
信尹も万句の発句を詠じたか否かについては未詳であるが、次の『信尹公御詠草』(1674、折紙一紙、全て信尹自筆)により禁中及び竹内門跡(曼殊院)に於いて行われた聖廟法楽歌会には信尹も出詠していることがわかる。

慶長七 二月 七百年紀也。百首二日に誦了。

来廿五日

禁中御法楽

信尹

紅梅

過がての袖にぞうつる色も木猶も梅の花の香こき紅の花の梅が上は下は、可改

初冬

神なづき空音に時雨をさきだて、木のはふりそむるし軒くの山風松

遠恋

まれにとふ契りの末のいかならんへだつる山もたかやすの里

竹門よりノ法楽

竹残雪

なびきふしてこぼれぬまきゝにつもりしやまだきえがての雪竹のしのくれ竹雪
けふことにきゆれば窓の雪の色も村竹のはのみどりもそぞひぞ行ふ

色かへぬ竹の緑も猶そひてきえ間あらはず園の白雪

御出京之次に候間、雖無余分懸御目候。被引直可被下候。

七百年忌に合わせて種々の催しが為される中で、信尹の法楽一夜百首は詠まれたのである。『時慶卿記』慶長七年二月二十八日条には、

一、近衛殿へ照高院殿御座候。予モ見舞申御酒給。山岡孫太郎初而知人二成、光淨院兄也。百首御詠被見周覽候。

と、「住吉法楽一夜百首」の時と同じく（前掲拙稿参照）、やはり信尹は時慶等にこの時の法楽百首を披露しており、そのことが書き留められている。「法楽一夜百首」というものは、信尹にとつて、神に奉納されるものであるとともに、人に披露されて残されるべきものであったことが窺える。

ここでこの百首の関連資料三点について確認しておく。上でも触れた【B3】『信尹公御詠草』（39240）は、底本とした【B1】『信尹公御詠草』（39242）と同じく百首の詠草。その書誌事項は以下の通り。

写本。大本。縦二八・二糶、横二二・五糶。一冊。楮紙。袋綴。仮綴。表紙、本文共紙。外題「北野法楽 慶長七年二月廿五日 從廿四日始之」（左肩・打付書、信尹筆）。内題「百首」。墨付十丁。遊紙なし。本文は信尹筆ではなく、周辺人物の筆か。但、書き入れは信尹筆。

二つ目は、『信尹公御詠草』（1920）【B4】である。豎紙の断簡一紙に冒頭四題の詠草部分のみが伝わる。縦三一・〇糶、横二四・六糶。信尹自筆。全文を示せば左記の通り。

【B4】

慶長七年二月廿五日

法楽

信尹

早春雪 久かたの空とちてふる雪のうちに雲路たどらで春はきにけり

山本の里や水無瀬とたともまて立そふ春の夕霞哉

孤嶋霞 うつる日の行多ははるゝ跡よりも嶋めぐりする朝がすみかな

あけぼのゝ雲と浪とはなれ嶋とみしかもかすみの遠にしづめる（朱筆）

霞隔村

山本の里や水無瀬とたどるまで立そふ春の夕霞哉
住の江やかすむながめはむべしこそとをさと小野の春のあけぼの

霞春衣 けふことにあさき山もふかみどりそふや霞の衣ほすらん
さほ姫のをりいだせばやけふことに霞の衣きぬ山もなし(朱筆)

四つ目の『信尹公御詠草』(59226)【B5】は、短冊を半分に分けた形の鳥の子紙(縦一九・〇×横五・八糎)五十九枚に当該百首の詠草を、一枚に付き一題もしくは二題分の歌を書き付けたもの。信尹自筆。巻頭の「早春雪」題から「寄鐘恋」題まで七十一首の詠草の短冊が一綴にされている。

以上、【B1】【B3】【B4】【B5】の先後関係を考えるために各々の巻頭の和歌を並べると、

【B1】 久方の空かきくらし降雪の雲路たどらで春は来にけり

【B3】 久かたの空とちてふる雪のうちに雲路たどらで春はきにけり

【B4】 久かたの空とちてふる雪のうちに雲路たどらで春はきにけり

【B5】 久かたの空とちてふる雪のうちも雲路たどらで春やきぬらん

となり、【B5】↓【B4】↓【B3】↓【B1】の順に推敲が為されたと考えられる。一夜という忽卒の間に詠まれたとされる百首であるが、少なくとも三段階の草稿が残されている。但、添削を受けたことを示す資料は残されていない。

二

さて、当「北野法楽一夜百首」にも、「住吉法楽一夜百首」の場合と同じく、父近衛前久による批評の言葉が残され

っている。『前久公筆書状詠草等』(3943)写。楮紙。縦三一・六糎、横五〇・二糎。折紙。一紙。端作「聖廟御法楽」。
前久自筆) がそれである。

【B2】

聖廟御法楽

- 一、早春雪 卷頭御作意殊勝之。
- 一、霞 キコエタル様ナルヘシ。義ナシ。
- 一、山本カスム水無瀬川ノ余情尤候。
- 一、今日毎ニ、殊勝之御趣向候。
- 一、ワカナ 尤候。
- 一、鶯 尤候。
- 一、池余寒 珍重候。
- 一、故郷梅 相聞申候。
- 一、潤落梅 面白存候。
- 一、春暁月 尤候。
- 一、鴈 尤候。柳 等同殊勝候。
- 一、春草短 同前。
- 一、蕨 同。
- 一、花初開 花満山 花早落 等同。

一、杜款冬 古寺藤 残春少 同前。

春部之御哥共執々面白存候。

一、首夏風 相聞申候。

一、朝更衣 尤候。岡新樹 同前。

一、谷郭公 殊勝之。郭公頻 同。

一、橘 尤候。菖蒲 同前候。

一、早苗 正風眼前之体、尤珍重候。

一、水鶏 キコエタルサマナルベシ。義ナシ。

一、夏草 同。蛩 同前。

一、山ガツノ垣ホアリトモ折くハアハレヲカケヨ、此余情候歟。

一、麓納涼 尤候。

一、湊夕立 珍重之。

一、杜夏祓 同前。

夏部、是又執々殊勝之。

一、新秋 面白存候。

一、七夕 同前候。幽居萩 等同。

一、萩 尤候。古砌薄 同。

一、原刈萱 尤候。寢覚虫 同。

- 一、海辺鹿 尤候。 秋夕 同前。
- 一、関駒迎 同前。
- 一、山月明 殊勝之。 江月冷 等同。
- 一、松月幽 尤候。 擣衣 同。
- 一、雲端鴈 同前。 堤上霧 等同。
- 一、鶉 尤候。 里黄葉 同前。
- 一、瀧紅葉 暮秋菊 等同。 秋部も無比類候。
- 一、初冬 珍重之。 吹カラニノベノ草木ノシホルレバムベ山風ヲ嵐トイフランノ余情相見面白存候。
- 一、渡時雨 尤候。 ミエタルサマナルベシ。
- 一、橋落葉 同。 寒草短 尤候。
- 一、江寒芦 尤相聞申候趣殊勝候。
- 一、河千鳥 珍重之。
- 一、渚水鳥 面白存候。
- 一、氷ノ御趣向相聞申候。
- 一、寒夜月 尤候。
- 一、篠上霰 殊勝之。
- 一、狩場霰 相聞申候。
- 一、庭初雪 尤候。 駅路雪 同前。

一、炭竈 歲暮 等同。

冬部是又無不足存候。

一、寄鏡恋 相聞申候趣候歟。

一、々燈々 殊勝之。

一、々枕々 相聞申候。

一、々蕙々 尤候。 々床々 同前。

一、々櫛々 同。

一、々琴々 々笛々 々絵々 等同。

一、々車々 ミズモアラズミモセヌノ趣向相見申候。尤候。

一、々舟々 尤候。 ミハウキ船ノヨルベシラズノ趣向相見申候。

一、々筏々 論語ニイカタニ乗テ浮海、其趣相見申候歟。

一、々棹々 尤候。

恋ノ部、是又珍重候。

一、隣里鶏 尤候。御作意面白候。

一、草庵雨 面白存候。 山館竹 等同。

一、橋上苔 田家水 等同。 珍重候。

一、塩屋煙 尤候。 行路市 同前。

一、羈中衣 旅泊夢 尤候。

一、望遠帆 珍重之。 老述懷 同。

一、思往事 尤候。惣見院殿加冠思召出候御趣向、催感涙候。

一、寄国祝 尤候。聖廟御法楽ト云軸ニ其趣殊勝存候。

右百首別而出来申候与愚意ニハ存候。猶々銘々ニ如此之事如何ニ候へ共、功者之衆へモ猶以可有御談合与存候故候。已上。

十一月吉日

後ろから二つ目の一つ書きの項目は、97番歌「くり返し忍ぶるはたゞむらさきのはつもとゆひの身の昔かな」の評で、天正五年（一五七七）の信尹加冠の折の烏帽子親が惣見院殿（織田信長）であったことを言う。前久の信長に対する評価と懐旧の情が窺えて興味深い。題詠の評価に私的体験が持ち込まれるのは親子ならでのこととも言えようが、諸願成就を願う「法楽和歌」ならでのことでもあろう。但、97番歌の和歌としての評価は「尤候」であり、高い評価ではない。

一 歌のはうびの詞に、尤よりは殊勝はまさり、殊勝よりは珍重はまさり、珍重よりは幽玄はまさり、幽玄よりは拔群はまさり、拔群よりは秀逸はまさり待ると也。いつも某よみ申たる歌のきよきは殊勝など被仰也。安田右京亮方よりの文にも殊勝の由被申とある也。〔尊師聞書〕53

褒詞の用い方は人によって違いはあるが、右に抛れば、褒め詞の中では最も低い評価を示す詞ではある。

三

以上のように、近衛信尹は慶長五年五月に住吉法楽一夜百首を、慶長七年二月に北野法楽一夜百首を詠じ、それぞ

れに父の前久は「批言」を残していたのだが、その「批言」の奥にはいずれにも「十一月吉日」とあった。端作もそれぞれ「住吉御法楽」「聖廟御法楽」と対をなし、いずれも折紙一紙で料紙の寸法もほぼ同じ、書風も同じと言ってよい。「住吉御法楽批言」【A2】の奥には、

神祇ニ玉津嶋姫、祝言ニ住吉、和哥両神候。オモテ向ハ申候ニ、御法楽、御祝義ヲ被相含候。御分別尤存候。聖廟御法楽ニハ勿論々々、天満神ト御哥ニ候ヘバ、併三神、家門守護之靈神御願成就御繁栄息災安穩御長久富貴万福無疑事、可為眼前ト存候故、為貴所御祈禱愚詠百首、彼三神ヲフサネ申、昨今令精神書付候。(下略)

とあり、【B1】の巻軸歌には「天みつ神と世にあふぐなり」とあった。「住吉法楽百首」の「批言」を書き付けた際には「北野法楽百首」も同時に見ていることがわかる。従って、二種の「批言」は同時に書かれたと言える。また、その際、「愚詠百首」が詠まれたとあるが、その百首に当たるものが、『前久公御詠草』(59168)【C1】および『前久公御詠草』(59174)【C2】の二点である。それぞれの書誌事項を掲げる。

【C1】写本。一冊。縦二八・二糎、横二一・二糎。楮紙。仮綴。表紙本文共紙。外題「龍山御百首」(左肩・打付書、信尹筆か)。墨付一八丁。前書を付す。裏表紙左端中程に「東」と記す。前久自筆。

【C2】写本。一冊。縦二六・六糎、横二〇・二糎。楮紙。仮綴。表紙本文共紙。外題「百首和歌早書」(左肩・打付書)。墨付一六丁。裏表紙左端中程に「十六」と記す。前久自筆か。

両者は同じ百首であるが、【C1】に付された前書が【C2】にはない。但、百首のうち四首(42・50・70・96)では【C1】の見せ消ちによる訂正後の本文を【C2】が持つ。また、60では【C2】の本文に新たな見せ消ち訂正がなされているので、【C2】の方が【C1】より後の本文を持つと考えられることになるが、逆に【C1】にある見せ消ち訂正がなされていない箇所(96)もある。従って、ここでは前書のある【C1】に抛り翻字を掲げ、【C2】との

異同を隨時（一）内に注記した。猶、宮内庁書陵部蔵『類聚百首』（502・16）三番目に所収の百首も同じ百首であり、【C1】の前書を有し、見せ消ちなどによる訂正後の本文を持つ。

【C1】

為住吉聖廟之法樂詠哥二百首、左府被詠之。可及一覽之云々。須遂再覽処神妙之。併可謂諸願成就基者乎。愁以此題予同愚詠二百首之覚悟雖在之、病後老耄之上依難叶、彼二百首之題於取合百首兩日之中書付之処、殊鹿草比興頓作与云、不及思案与云、彼是全可憚他見。誠神慮家門繁昌之祝儀斗也。

百首和歌

春二十首

早春雪

龍山

1 梅のはなあまぎるゆきにみえずともけふるはるぞ人にしらるゝ

孤島霞

2 吹おろす磯山かせにさそはれて霞も海にうきしまがはら

霞隔村

3 一村の野中のさとをたちかこふかすみのまがきいくへともなし

霞春衣

4 さほひめの手染のいろかあさ緑霞のころもをりさらすらん

沢若菜

5 かつもゆるみどりの色の浅沢もふかきはみつの根芹なりけり

山家鶯

6 さびしさもはるはわすれてすむ庵ぞ山のかひあるうぐひすの声

池余寒

7 ひまみゆる池のこほりも岩たゝむあはひはみづのをともたえつゝ

故郷梅

8 むめの花すみあらしたる故郷に色もにほひもかはらざりけり

澗落梅

9 わが袖にせかばや梅のはな落て水かうばしき春の谷川

春暁月

10 みじか夜は夏か春かと思ふまにはや暁にかすむつきかな

去鴈遙

11 天津鳥なみのはるかに行声を吹かへしてよはるの浦かせ

柳似烟

12 つなぐ江の舟よりのぼるゆふ煙おなじなびきの風の青柳

春草短

13 つのぐめるあしの若葉の水がくれにまだ一ふしもみえぬ難波江

嶺間蕨

14 わけのぼる霞のひまの嶺つたひおるもすくなき袖の早蕨

花初開

15 一花のさきそめしより諸人の今日九重にいざなはれ行

花満山

16 吉野山嶺にもおにもしら雲のこりあるばかり花やさくらん

花早落

17 見るほどもあらしの山の花ざかりひとつふたつもちるはおしきに

杜款冬

18 神なびのもりの木陰の山吹やいはぬ色にもうつる川水

古寺藤

19 とふ人におびまつはりて藤かつらしばしはとめよ古寺の暮

残春少

20 陰深き青葉の中の桜ばな一木に春や暮残るらん

夏十五首

首夏風

21 春は昨日秋の村立吹風にさそはれてなけ山ほとゝぎす

朝更衣

22 今朝ははや夏きにけりとなぞへなく人なみくにかふる衣手

岡新樹

23 はなに見し木々もいつしか陰くらく道見えぬまでしげる岡越

谷郭公

24 山びこのこたふる谷のほとゝぎす一声にまたつゞく声く

郭公頻

25 まつほどもかぎりこそあれ郭公五月の空は落かへり鳴

橘薫枕

26 枕香にまがふと人も思までうき名やたゝん軒の橘

簷菖蒲

27 ふきかこふ軒のつまなるあやめ草香もなつかしき袖の上哉

採早苗

28 しづのめが笠の端ひたしふる雨に水の深田の早苗とるなり

泊水鶏

29 舟つなぐ芦の丸屋のかりの戸をたゝくに似たる水鶏なりけり

野夏草

30 はなちかふ夏野の原の馬牛もみえぬばかりにしげる高萱

雨中螢

31 草村の中に螢のともす火の雨にきえぬもあやしかりけり

垣夕顔

32 あはれこそ猶ふかゝらめあれわたる賤が垣ほのはなの夕がほ

麓納涼

33 小蔵山ふもとの野辺の夕風に夏なき露ぞ袖草に乱るゝ

湊夕立

34 にはかにも夕立雨にみなと江や苦ふきつるゝ浦の船長

杜夏祓

35 みな月の夕はらへして神に又ちかひたゞすの森の下かげ

秋二十首

新秋露

36 このねぬるあさけの秋の白露やまづ草村にむすびそめけん

待七夕

37 待えたる七夕妻の逢瀬こそたえせぬ秋の天の河波

幽居萩

38 わづかなる草の庵りは風そよぐ籬の萩に見えつかくれつ

萩映水

39 咲こえてねたる小萩の川岸にちらぬもしづむかげやみすらん

古砌薄

40 山ちかみにはもまがきもあれはてゝうへぬすゝきぞかげをふかむる

原刈萱

41 露深み袖に分入野の原の薄かるかやみだれあひたり

寢覚虫

42 野辺ちかき草かみの庵くづれりになきいよりて寢覚の友となる

（初句「野わきせし」二句「かべのくづれに」三句「な

き入て」結句「なるきりぐす」

海辺鹿

43 吹いづる高ねおろしに奥津波鹿の音よする秋の入うみ

秋夕風

44 霧まよふ夕はいとゞわびしきに秋の野風の袖に露けき

関駒迎

45 逢坂の関の東を跡さきに引こそそのぼれ望月の駒

山月明

46 吹はらふ嵐の上の村くもゝ跡なくてはらす山の端の月

江月冷

47 江の水に影もつかびて秋の月船にねし夜の風は冷じ

松月幽

48 うす霧に暮行嶺のかけ高きまつの葉こしの月幽なり

擣寒衣

49 ほそ布の胸あらはれてはださむき夜るの衣はうつかひもなし

雲端鴈

50 しら雲にかはせる鴈もはねかつら海山かけてこえやきぬらし（二句「かはせる鴈の」）

堤上霧

51 淀川やつゝみの柳みえぬまでいく重の霧の立まよふらん

野径鶉

52 行かよふ野路の茅原に声絶て鶉のふしどいづちかふらん

里黄葉

53 山里の梢の秋はくちなしといはぬばかりの木々の色かな

滝紅葉

54 山姫や紅葉の錦をりぬらん滝の白糸たてぬきにして

暮秋菊

55 行秋ようつろひぬとも白菊のちらぬかぎりはしばしとゞまれ

冬十五首

初冬嵐

56 今朝ははや風も嵐に音かへて冬めきわたる雲ぞしぐるゝ

渡時雨

57 舟わたす川のなかばの村時雨さほとりあへぬ袖のひぢかさ

橋落葉

58 ちりつもる木の葉にそばのかけ橋やたゞ埋木の人しれぬ道

寒草短

59 かれのこる芝生が道はふむ跡もそのまゝみゆる霜のむらぎえ

江寒蘆

60 みしま江や入江のまこもむらあしもひとつ枯葉に氷とぢけり
(初句 「み^今しま^朝江^みや^{れば}」)

河千鳥

61 川かぜのさむくふく夜は立別しばなく千鳥友したふなり

淵水鳥

62 山川のこほらぬ淵をたのみとやうきねをさらぬ鴛鴨の声

井辺氷

63 くみすつる石井の水のうるほひの今朝は氷にしるき民の戸

寒夜月

64 風の音も柴の庵のひまをあらみ霜夜の月のさむき袖哉

篠上霰

65 風さえてあられふる夜のさゝ枕さらくぬべき旅の衣手

狩場霰

66 かり衣はしるあられの玉ゆらのいのちあやなき鷹の追鳥

庭初雪

67とふ人の跡もうしとやおしむらん朝戸明たる庭の初雪

駅路雪

68あふ坂の関のしらゆき踏分て都の方にいそぐ駅路

遠炭竈

69富士の雪思ひやられて立のぼる煙を雲に嶺のすみがま

歳暮念

70あすしらぬ世ながら年はふりはてゝ花のはるをやま^もち^ないそぐらん（下句「花のはるをや^もま^なち^にいそぐらん」）

恋十五首

初恋

71いひよらんたよりもなみの海士小船恋そめしより独こがるゝ

忍恋

72あさはかにうき名やもれんしのぶれどたのむ使はいはけなき人

聞恋

73夕く吹くる風の音にのみきくの白露いつかはらはん

見恋

74小車の小簾吹あぐる夕風にほのみし人のおもかげにたつ

尋恋

75名のらねば其名をだにも白波の何をよすがにたづねよらまし

祈恋

76きぶね川あさからずしもいのりをく心を神もあはれとはしれ

契恋

77かはらじとちぎりをきてもあだなりしころのすゑはいかでたのまん

待恋

78さねこんといひてむなしき閨の戸は月にもうしとかこちがほなる

遇恋

79洩ぬともいとはじものよ恋くゝてあふにかへたるうき名なりせば

別恋

80深き夜を鳥の空音にはかられて別出たる袖の露けさ

顕恋

81あやなきは塩のみちひの玉かしは見えみみえずみかゝるあだ波

稀恋

82ことはりにうらみぞとくる稀にあふ中のさはりの宮仕人

忘恋

83いつよりか種うへそめし忘草かれはつる中と成にけらしも

恨恋

84身のほどを君がつらさにくらぶれば恨はつべき言の葉もなし

絶恋

85さゝ竹のうきふし／＼をいひ出て我かよひぢやたえんとすらん

雑拾五首

関鶏

86あけぬぞとゆふつけ鳥に旅人の駒乗つれていづる関の戸

山家

87となりさへあらぬ深山の庵ながらいとはしき世をのがれてぞすむ

田家

88かりてほす山田の稲ををのづから篠の庵りにふきぞそへたる

峯松

89雪もよに嵐はげしき音すなり雲にひとしき峯の松がえ

籬竹

90あらはなる籬は竹をしほり戸の冬がまへする柴の庵哉

路苔

91岩橋も松のしづくに苔生て道踏まよふ奥の古寺

岡篠

92岡越やこすげをすゝき風わたる中にみだるゝすゞの篠原

沼芦

93 白鷺のあさるあさみの沼水にをもだかまじるあしのいくむら

嶋鶴

94 一声もいかでまぎれんむれつゝもうのゐる嶋にたてる白鶴

樵夫

95 ゆくとくとと軒端の山の松高き梢をつたふきこりとぞみる

旅行

96 武蔵野はやいくかになりけぬん露霜に袖ももすそもやつれはてつゝ（二句「いくかになりぬ」）

野宿

97 人すまぬ野原の塚の草の庵むべも狐のふしどなるべき

眺望

98 みなと船縄手ひかへてまてしばしきたけにむかふ奥津塩風

神祇

99 すみよしの神のみならでことの葉の道をやみがく玉津嶋姫

祝言

100 天満る神やうけゝんこゝろさし深きねがひのかなふ此時

右の前書き部分に拠れば、当百首の詠作事情は以下の通りである。信尹詠の【A1】「住吉法楽百首」と【B1】「聖廟法楽百首」、計二百首を信尹から見せられた前久は、神妙なる出来映えであると評価し、諸願成就のため、同じ歌題

で以て前久も二百首を詠む覚悟であつたが、病後老耄のためそれが叶わず、二百首の題から取り合わせて百首の題として、兩日のうちに（一夜に）百首を詠んだというものである。確かに、春から冬までの七十首は「聖廟法楽百首」と同題で、恋・雑の三十首は「住吉法楽百首」と同題で詠まれている。

この【C1】百首はいつ詠まれたものか。前書きに「左府被詠之」とあるので、信尹の左大臣在任中である。信尹が左大臣に復したのが慶長六年正月六日から慶長十年七月二十四日であるので、「聖廟法楽百首」が詠まれた慶長七年二月二十五日以降、慶長十年七月二十四日までのことに限られる。さらに、次の前久の書状の日付によつて、年は未詳だが十一月二十日頃であることがわかる。

御札本望之至候。仍二百首御詠哥并愚詠未相届候由承候。今朝申付進之候処、曲事候。主水召仕候者にて候太良右衛門与申候者にて候。先参上申、それより病人見廻候て罷帰候刻、若御返事も候はゞ、以誰々成共伺候へと申させ候ニ、沙汰之限候。未相届候者、主水宿敷拙者屋敷かに可居候与存候。惣別主水手ぬるき故、下々に召仕候者迄もあなどり如此候与相見申候。主水は西岡へ二三日以前より罷越候由申、只今從西岡申越候。いか成共まう彼うつけもの可令持参候歟。万一令難渡候はゞ、右之両所へ御下人被遣可有御尋候。かしこ

霜月廿一日

封

御報

東入

（尚書き）猶々御詠哥共一兩日以前二再三遂閑覽申候へ共、拙者下書清書不成候故、小姓ニ誂申候ニ付、漸今朝進之候キ。光照院も為見廻被越、愚詠兩日ニ彼側にて書付候事被存候キ。雖無油断候、咳病故彼腹中、又脹候て彼是遅延申候。呉々御作意共殊勝存候。猶以聖廟之御法楽出来申候キ。又、細々禁裏御会御出座之由目出度存候。御執心共奇特与存候。度々可致案内之由被仰出候へ共、未すきくと腹中無之候間、不成参上候事迷惑仕候。又乍

近衛信尹・前久詠「法楽一夜百首」 致

恐御床敷御残多存候。御製は聴聞久不仕候。是のみ存斗之由御参内之御次ニハ御申頼入存斗候。呉々主水召仕候太郎右エ門ニ堅申付之由、久七申候。但又御するに預置、それより上の屋敷へ参候ものかとふしん申候。猶又。御台所をも御尋させ候べく候。をかしきぶんかうに入候てまいらせ候キ。於爰元あらく、糺明申候へハ、いつも御台所へ早々参候へ共、事広御所故御取次之衆、早速ニ不成候ニ付預申、上へあけられ候へと申候て、其中ニ又屋敷へも参候事候間、もしく、左様ニも候かと、彼うつけものゝ如申候。当所えものにて候。曲事候。かしこ

〔前久公書状〕 38855)

霜月二十一日付けの書状で、二三日以前に御詠歌二百首を覽て、二日で愚詠(百首)を書き付け、今朝信尹のもとへ送り返したのだが、未だ届いていないことを「曲事」と批難している。従つて、前久の百首【C1】は慶長七年か八年か九年の十一月十九日・二十日にかけて詠まれたと考えられることになり、【A2】【B2】の前久による「批言」の日付が「十一月吉日」であつたことも符合する。

信尹が「住吉法楽百首」を詠んだ慶長五年は、秀吉による薩摩「左遷」から戻りはしたものの、未だ左大臣選任以前、関白氏長者に至るべき近衛家当主として不遇である。翌慶長六年正月に三十七歳にして左大臣選任は成るが、「北野法楽百首」を詠んだ慶長七年は、日野家との家礼の問題あるいは所領問題で、信尹と徳川家康との不和が報告されている(橋本政宣氏「慶長七年における近衛家と徳川家康の不和」、『近世公家社会の研究』吉川弘文館、二〇〇二年)。とすれば、【C1】が詠まれたのは、信尹の二百首【A1】【B1】が詠まれてからあまり時を措いてとも考えにくく、慶長七年とするのが妥当かとも思われるが、確定はできない。そもそもこの時期は未だ信尹に嗣子がいない。前久の娘、前子所生の後陽成天皇の四宮が近衛家の養嗣子、近衛信尋となるのは慶長十年八月のことである。慶長五年から九年時点において前久・信尹は、摂家としての近衛家の将来を憂慮すべき状況にあつたのである。

第三章始めに所引の「住吉御法楽批言」【A2】には「聖廟御法楽ニハ勿論々々、天満神ト御哥ニ候へバ、併三神、家門守護之靈神御願成就御繁栄息災安穩御長久富貴万福無疑事、可為眼前ト存候故」とあり、繁栄・息災・安穩・長久・富貴・万福と諸願を並べ立て祈るのは、「家門、守護之靈神」に対してであった。また、第二章の最後で言及したように、「北野御法楽批言」【B2】に於いて、その97番歌に対して「一、思往事 尤候。惣見院殿加冠思召出候御趣向、催感涙候」と前久が書き付け涙するのも、近衛家のために信長の庇護が続いておればとの思いからであろう。つまり、【A1】【B1】【C1】の法楽百首は、家の繁栄・息災等のためという信尹・前久の切実な願いが込められ詠まれたものであったと考えられる。

抑、法楽和歌は神仏に祈願を込めて詠じられるものであるが、詠じることが難行苦行であればそれだけ神仏もそれに感応する。その「難行性」（浅田徹氏「中世後期法楽定数歌の機能について——速詠化、続歌との「棲み分け」——」、『和歌文学研究』一一〇号、二〇一五年五月）は、いまの場合、一夜百首の速詠がそれに当たる。左の前久の書状は、「三木」すなわち信尹宛で、文中に「二百首」「令一覽候」とあるので、【C1】が詠まれる際のものと思われる。

昨日二百首、大形昨今令一覽候。又、令再覽返進可申候。執々奇特千万に候。殊両日に百首御勲候与相見候。御願作之中、猶以無申計候。巻頭の御哥、風情無之物にて候に御趣向殊勝之。次一夜百首後迄相残物候間、よき紙筆など相調清書候て進之度候へ共、紙もよきは拂底候。をそく候へば、誠に難渋、如何被思召候へば与、まづ悪事迄直候て進之候。猶御らんじ候て可承候。我等は

（以下、尚書き）再覽候ても忘却のみ候。乍御六借、今一度御らんじ候て可承候。又、なん申候。一日は見事之柿被下候。過分存候由申候てと申候。御返事までも候まじく候。咳病以外に候て、書中無正躰候。

(宛名部分) 返事に不可承候。今一度御らんじ候て可承候。殊此一冊、夜中於灯火【編】「ヨキ」【編】」
三木殿 申させ給へ
りう

『前久公書状』2235)

前久は信尹の二百首を「執しりど々奇特千万」と評した上で、一夜のうちの頓作であるためなおさら奇特であるとし、さらに、一夜百首は良き紙、良き筆で以て清書し後々まで残して置くものと言う。つまり、神仏に対して奉じられるものではあるが、同時に周りの人たちや子孫に対しても詠み置かれたことになる。確かに、信尹の「北野法楽一夜百首」【B1】に至るまでには【B5】から【B3】の三段階の推敲が為されていた。前久の百首【C1】にも同じ百首の詠草が伝わる。速詠でありながら、何れも人の目を意識して完成稿が目指されている。実際に、住吉【A1】の場合も北野【B1】の場合も、七日後と三日後に西洞院時慶らに百首が披露されていた。やはり、家門の繁栄と存続の為、これらの法楽和歌は詠まれたのであった。

実は、前久はこの前後、他にも一夜百首を何度も詠じている。『前久公御詠草』(59165)は「ある人の祈祷に、文禄三年五月三日より同九月三日までのうちに神名仏名をかしらにすへて日をさだめ一日に百首づつ千首の哥をよみけり(下略)」との前書を持つ。この折の詠草と確認できるものは二百首分しか見出せていないが、おそらく冠字一夜百首がこの四ヶ月の間に十度詠まれたとしてよいであろう。「ある人の祈祷に」とある「ある人」とは、直前の文禄三年(一五九四)四月十五日に都を立って薩摩に左遷された信尹に違いなかるう。また、『前久公御詠草』(59157、外題「龍山御百首」)は、慶長八年十月十五日の日待に詠まれた一夜百首(端作「慶長八年拾月十五日為日待法楽一夜百首詠哥自亥刻至寅下刻勲之」)であるが、その折と思われる信尹宛前久書状の一節に以下のようにある。

(上略) 愚詠一夜百首哥共見合書入。自是可申候。既一夜三百首勤之候間十首もヨキ哥非可有儀候歟。昔之月清ニモ

二夜三百首ヨマ□候トハ相見候。一夜百首も在之儀ナガラ稀ニ相見申候。去々年一夜ニ二百首両度ヨミ候。三千首十四五日之中ニ令終行氣力尽、ソレカラ万端鬱憤旁ニ令発病候キ。今度者、日待立願故ニテ候キ。(下略)

『和歌に関する御書状及御書付』78931)

前久の言を信ずれば、「去々年」すなわち慶長六年に「一夜二百首」二度を含め、十四五日のうちに三千首を詠じたという。日数は必ずしも正確ではないのであるが、実際、「詠三千首和歌」の端作を持つ前久の詠草が伝わる。

詠三千首和歌

法衆

東入

春二十首

立春

いづる日のけさはかすみて天のとのあくるかたより春やたつ覧 (下略) 『前久公御詠草』59156)

但、「詠三千首和歌」とありながら記されているのは一つの百首のみで、これも他の詠草は確認できてはいない。もし実際に一夜百首ないしは二百首を十数日間詠み続けたとすれば、前久が、そのため「氣力尽、ソレカラ万端鬱憤旁ニ令発病候キ」と言うとおおり、まさに命懸けの難行を行ったことになる。撰閲家である近衛家を守ることの重みが実感されるとともに、和歌がその重庄を荷う役割を担っていたことも示されていると言えよう。前掲浅田徹氏論文は室町期定数歌に於ける法衆和歌の盛行を指摘するが、それは、戦国の世を生き抜くことが、公家にとっても容易なことではなかったことを物語っているのではないか。法衆和歌を詠む営みは家門の存続の保証を求めるものでもあったのである。

〔追記〕資料の閲覧・翻字のご許可等、陽明文庫長名和修氏にご高配賜りました。期して深謝致します。なお、本稿は科学研究費基盤研究(C)一般および本学研究経費助成の研究成果の一部である。(本学教授)